

新技術名：リンゴ褐斑病菌の一次感染に対するデランフロアブル、ジマンダイセン水和剤の防除効果（平成11～13年）

研究機関名 果樹試験場 環境部 病害担当  
担当者 佐藤 裕・水野 昇

[ 要約 ]

リンゴ褐斑病菌の子のう胞子による一次感染時期は4月下旬から7月上旬で、この期間のデランフロアブル2,000倍またはジマンダイセン水和剤600倍の散布により、本病の発生が抑制される。

[ ねらい ]

リンゴ褐斑病の一次伝染源である子のう胞子の飛散消長を明らかにするとともに、一次感染に対する有効な防除薬剤を検索する。

[ 技術の内容・特徴 ]

- 1．2000年と2001年の調査の結果、子のう胞子飛散は2000年には4月27日から7月8日まで見られ、その最多量飛散は5月9日であった。また、2001年には5月26日から6月29日まで見られ、最多量飛散日は5月31日であった。この2カ年の調査結果から、子のう胞子による一次感染期間は主に4月下旬から7月上旬と考えられる（図1）。
- 2．1999年と2000年に開花期から初発確認日（7月上旬）までの期間にほぼ10日間隔で散布した結果、デランフロアブル2,000倍およびジマンダイセン水和剤600倍散布区は収穫期まで発病が少なく、本病に対する防除効果が高かった（表1、2）。
- 3．デランフロアブルおよびジマンダイセン水和剤は開花期から6月上旬までの黒星病を主体とした防除薬剤として実用化されており、この時期に使用することで褐斑病との同時防除が可能である。

[ 普及対象範囲 ]

県内リンゴ栽培地域

[ 普及・参考上の留意事項 ]

デランフロアブル、ジマンダイセン水和剤はいずれも、体質によって皮膚にかぶれを生じるおそれがあるので、注意する。

表1 リンゴ褐斑病に対する各種薬剤の防除効果 (1999年)

供試薬剤	希釈倍数	調査葉数	発病葉率 (%)
デランフロアブル	2,000倍	4 8 9	0 . 4
ジマンダイセン水和剤	600倍	5 2 1	4 . 2
アントラコール水和剤	500倍	3 7 1	1 1 . 3
ルビゲン水和剤	3,000倍	4 1 8	2 4 . 6
ブルーク水和剤	1,000倍	4 2 1	2 6 . 4
パルノックス水和剤	600倍	4 4 3	2 6 . 9
アンビルフロアブル	1,000倍	3 6 6	3 8 . 5
ユニックス水和剤	1,500倍	3 5 8	3 9 . 4
ストロビドライフロアブル	3,000倍	4 1 7	4 0 . 1
ブラウ水和剤	1,000倍	4 1 8	4 7 . 6
オーソサイド水和剤	800倍	3 3 9	4 7 . 8
無散布区	-	3 6 0	8 0 . 3

供試剤の散布は4/21、30、5/10、22、6/1、11、21、7/5の計8回。試験散布以降は8月にロブラール水和剤1,500倍を無散布区を含め2回使用した以外、殺菌剤は使用しない。調査は10月26日。

表2 リンゴ褐斑病に対する各種薬剤の防除効果 (2000年)

供試薬剤	希釈倍数	調査葉数	発病葉率 (%)
デランフロアブル	2,000倍	2 1 1 4	0
ジマンダイセン水和剤	600倍	9 8 2	0
アントラコール水和剤	500倍	1 4 2 0	2 . 2
ルビゲン水和剤	3,000倍	1 3 1 5	4 . 7
ブルーク水和剤	1,000倍	1 8 4 5	4 . 1
パルノックス水和剤	600倍	1 4 7 9	3 . 1
アンビルフロアブル	1,000倍	1 5 1 3	4 . 9
ユニックス水和剤	1,500倍	1 5 8 0	3 . 8
ストロビドライフロアブル	3,000倍	1 6 0 7	1 . 9
ブラウ水和剤	1,000倍	1 2 9 5	1 . 7
オーソサイド水和剤	800倍	1 2 9 2	1 . 2
無散布区	-	1 3 2 8	3 0 . 8

供試剤の散布は5月1、11、22日、6月1、12、23日、7月5日の計7回。試験散布以降は7月21日、8月4、21日に無散布区を含め、慣行の殺菌剤を散布した。調査は11月1日。

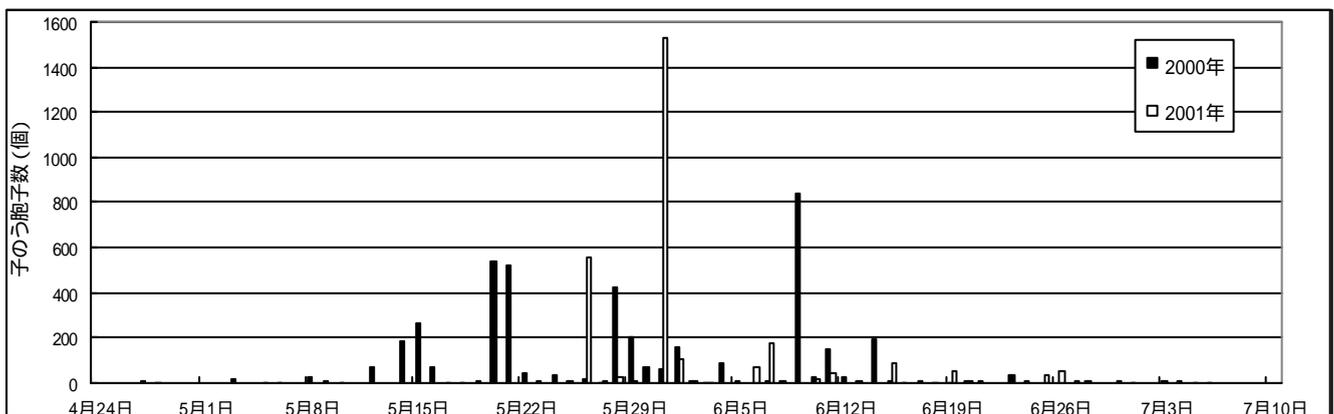


図1 リンゴ褐斑病菌の子のう胞子飛散消長